



加藤良一

平成14年(2002) 4月24日

Atlantaには、米国時間の夕方4時30分に到着した。成田からの飛行時間は約12時間だった。いささか疲れた。そこから New York への乗継ぎ便は6時、まだ1時間半もある。

アメリカ本土には西から東に四つの時差帯がある。西海岸のSan FranciscoからLas Vegasあたりまでの **Pacific Time**、Salt Lake CityからDenverまでの **Mountain Time**、そこからChicagoまでの **Central Time**、Atlantaから五大湖を含んで東のBostonまでの **East Time**の四つである。東海岸と西海岸では最大3時間の時差となっている。これにAlaskaとHawaiiを加えると合計6つの時差帯になる。同じ国の中で時差が6つもあるのだ。米国がいかに大きな国か分かってしまうもの。

成田から乗ったのは国際線のジャンボ機だったが、Atlantaで乗継いだ国内線の飛行機はずっと小さかった。客席も横に5列しかない。そんな小さな飛行機に大きな体のアメリカ人が窮屈そうに座っていた。もちろん乗員乗客含めて日本人はぼく以外一人もいなかった。少々心細かったが、隣の座席の若い女性は、いかにもアメリカンという大柄でボリューム満点の人だ。でも人は悪くなさそうだった。ここまで来て、まったくのアメリカ国内に入ってしまったことを実感した。

目指す空港は、Newark International Airportである。New Yorkの周辺には4つの空港があり、市内に最も近いのがLa Guardia Airport、ほかにJohn F. Kennedy International Airport、Teterboro Airport、そしてNewarkである。そのほかにも小さな空港がいくつかある。TeterboroとNewarkは、New York市ではなくハドソン川を挟んだ西隣のNew Jersey市にある。

AtlantaからNewarkまで2時間30分の飛行だった。何はともあれ無事Newarkに到着し、荷物も他の飛行機に乗ってとんでもないところへ行くこともなく無事に一緒にたどり着いた。空港から市内のManhattanまで距離にしてさほどのことはない。タクシーでもよいが、雲助が多いと聞いているのと、シャトルバスのほうが安くて便利で安全そうだ。ここはひとまず乗り合いのシャトルバスを選ぶことにしよう。

「タクシーを探しているのかい？」

いよいよきた。ヒスパニック系とおぼしき男が、さっきからずっとぼくにつきまとっている。あいつはたしかぼくがエスカレータを降りたときから近づいて来ていた。どうやらタクシー運転手だ。そんなにワルじゃなさそうだが、表面だ

けで判断しては危なかり、内心では困ったなと思いつつも、こちらはシャトルバスに決めていたので「けっこうだよ、ありがとう」と軽く断って無視し、シャトルの受付を探した。シャトルのキップ売り場はほどなく見つかった。案内の黒人女性がすぐにシャトルが発車するというので急いで飛び乗った。空港を出るまでに、あちこち回りながら何人か拾い、シャトルは順調に市内に向かって走り出した。これでひとまず安心である。ずいぶん遠くへ来たもんだと、眠い目をこすりながら夕闇に沈むNew Yorkの街並みを眺めていた。

シャトルはハドソン河のトンネルや橋を抜け、やっとNew York市内に入ったが、そこからがたいへんだ。乗り合いバスだから、つぎつぎとホテルを巡って市内を走り回るのだが、いつこにHilton Hotelには着かない。いつになったら着くだろう。すこしずつ時間が気になりはじめた。けっきょくManhattanのHilton Hotelに着いたときには、すでに夜の11時を回っていた。よくよく考えると、そこそこ高級なHilton Hotelにシャトルバスで乗りつけるというもじつに妙なもので、ほとんどの乗客はもっと安価なホテルで降りる人たちばかりだった。こんなことならタクシーにすればよかったとの後悔がちらりと頭をかすめないでもなかったが、それでも、とにかく無事ホテルへ到着したことでよしとするしかなかった。



Hilton Hotelは、Central Parkの南側にあるいいホテルだ。そこはManhattanのど真ん中に位置している。Central Parkまでは歩いて数分の至近距離だし、有名なスポットにはこと欠かない。ロケーションとしては最高の場所である。Manhattan南端には、2001年9月に旅客機が突っ込むテロ攻撃で消えてしまった世界貿易センタービルがあった。Hilton Hotelからは南へ数キロの距離である。

New YorkのManhattan島は、オランダの西インド会社が、1626年に先住民であるIndianから「史上最大のバーゲン」と呼ばれる安値で買い取ってしまったものである。Indianにしてみれば、自分たちの土地を売るという行為が、どういうことかよくわかっていなかったようだ。つまり白人が騙した取ったようなものである。西インド会社がIndianに支払った金額は、アルコール類や日用品など60ギルダー分だけだった。60ギルダーは、現在の価値にしても、たったの100ドル、つまり1万2千円くらいにしかない。

今にして思えば信じがたいほどの安さであるが、それでも西インド会社の中にはこの売買にさえも渋る者がいたというから、当時のManhattan島に対する評価がいかに低かったか知れようというものである。

Manhattan南端の地は、オランダのAmsterdamにちなんでNew Amsterdamと命名され、隣りのNew Jerseyも巻き込んで順調に発展を続けていった。さらに、Indianやヨーロッパとの交易が盛んになるにつれ、全体を総称してNew Netherlandsと呼ぶようになった。

そんな活気に満ちたNew Netherlandsに、1664年、町をひっくり返すようなたいへんな出来事が起きてしまった。当時オランダとイギリスの関係はあまりうまくいっていなかった。イギリス国王チャールズ二世は、オランダの植民地であるNew Amsterdamを含む、広大な土地を弟のYork公に与えようとNew Amsterdamに戦争をしかけたのである。艦隊指揮官でイギリス人のRichard Nicholsは、York公の命を受け、New

Amsterdamに攻め入った。ところがこの攻撃を受けた、ときのオランダ総督は、周囲の説得に従ってあえなく降伏してしまった。オランダ総督は、じつは不人気な総督で、人心を掌握できなかったことから、誰もが勝ち目がないと思い込んだのが敗因ともいわれている。

こうして、それまでNew Amsterdamを支配していたオランダは、Nicholsの元に降伏し、38年間の歴史に終りを告げた。Nicholsはこの地をYork公の名を讃えて、New Yorkと改名すると宣言した。これがNew Yorkの始まりである。



New Yorkは、1825年にエリー運河が完成して、ハドソン川と中西部の五大湖地域が水路で結ばれ、アメリカの内陸部とイギリスまでがいきなり船で行き来できるようになり、港町として大いに栄え、現在に至る基礎を築いた。

Indianは、New Yorkの価値を見出すことができないまま、白人に二束三文で土地をあげわたってしまったのである。これが、その後のIndian苦難の道のスタートとなった出来事である。

[Back](#)[「洗濯船」Top](#)[Home](#)[「Home Page」](#)